

岐阜城(稲葉山城)(国史跡, 百名城)(岐阜市天主閣)

岐阜城（ぎふじょう）は、岐阜県岐阜市（旧・美濃国井之口）の金華山（稲葉山）にある山城跡。織田信長が、斎藤龍興から奪取した稲葉山城の縄張りを破却して、新たに造営したものが岐阜城である。城跡は岐阜城跡（ぎふじょうあと）として国の史跡に指定されている。

『信長公記』に、「尾張国小真木山より濃州稲葉山へ御越しなり。井口と申すを今度改めて、岐阜と名付けさせられ」と記載されている。稲葉山（井口山）からの続きが瑞龍寺山という。

鎌倉・室町時代

- 1201 年（建仁元年）－ 二階堂行政が稲葉山に砦を築いたのが始まりとされる。続いて行政の娘婿・佐藤朝光、その子伊賀光宗、光宗の弟・稲葉光資が砦の主となり支配。二階堂行藤の死後、廃城となる。
- 15 世紀中頃－ 美濃守護代・斎藤利永が、この城を修復して居城とする。

戦国時代

- 1525 年（大永 5 年）－ 斎藤氏家臣の長井長弘と長井新左衛門尉が謀反を起こして稲葉山城を攻撃。長井氏の支配下となる。
- 1533 年（天文 2 年）－ 新左衛門尉が没すると、その子、長井新九郎規秀（斎藤利政、後の斎藤道三）が後を継ぎ、城主となる。
- 1539 年（天文 8 年）－ 守護代になっていた斎藤利政が、稲葉山山頂に城作りを始める。
- 1541 年（天文 10 年）－ 利政、守護土岐頼芸を追放。
- 1547 年（天文 16 年）－ 織田信秀、頼芸派の家臣と稲葉山城下まで攻め入るも大敗（加納口の戦い）。
- 1554 年（天文 23 年）－ 利政、城と家督を嫡子の斎藤義龍に譲り剃髪、道三と号する。
- 1556 年（弘治 2 年）4 月－ 義龍、長良川の戦いにより道三を討ち取る。
- 1561 年（永禄 4 年）5 月－ 義龍の急死により、斎藤龍興が 13 歳で家督を継ぎ、城主となる。
 - 同年 6 月－ 十四条の戦いに勝利した織田信長が稲葉山城を攻めるも敗退。
- 1564 年（永禄 7 年）2 月－ 斎藤氏の家臣であった竹中重治と安藤守就が造反して挙兵。稲葉山城を攻める。龍興らは城を捨て、竹中らが城を半年間占拠する。
- 1567 年（永禄 10 年）9 月－ かねてから美濃攻略を狙っていた織田信長が西美濃三人衆の内応により稲葉山城下に進攻（稲葉山城の戦い）。龍興は城を捨てて長良川を舟で下り、伊勢長島へ逃亡した。
 - 同年－ 信長は、本拠地を小牧山城から稲葉山に移転し、古代中国で周王朝の文王が岐山によって天下を平定したのに因んで城と町の名を「岐阜」と改めた。この頃から信長は「天下布武」の朱印を用いるようになり、本格的に天下統一を目指すようになった。
- 1576 年（天正 4 年）－ 信長は嫡子織田信忠を岐阜城の城主とし、織田家の家督及び美濃、尾張の 2 ヶ国を譲る。岐阜城の整備改修は信忠によって更に追加された。
- 1582 年（天正 10 年）6 月 2 日－ 信忠が本能寺の変で倒れると、家臣の斎藤利堯が岐阜城を乗っ取る。しかし、明智光秀が羽柴秀吉に敗れると織田信孝に降伏。
 - 同年 6 月 27 日－ 清洲会議により信孝が兄・信忠の遺領美濃国を拝領、岐阜城の城主及び、信忠の嫡子三法師の後見となる。
 - 同年 12 月 20 日－ 羽柴秀吉、丹羽長秀、池田恒興の嫡男・元助らの兵が岐阜城に迫ったため、和睦。三法師を引き渡す。

- 1583 年（天正 11 年）4 月 16 日 - 信孝は長島城主の滝川一益と呼応し再度挙兵。しかし美濃返し（賤ヶ岳の戦い）によって柴田勝家が敗れ、兄・信雄によって居城の岐阜城を包囲されると、これに降伏した。城からは逃亡が相次ぎ降伏時の人数は 27 人であったという。その後、信孝は切腹させられた。
 - 同年 5 月 - 池田恒興が美濃国にて 13 万石を拝し大垣城主となると、池田元助が岐阜城主となる。
- 1584 年（天正 12 年） - 小牧・長久手の戦いで池田恒興と元助が討死したため、恒興の次男・池田輝政の居城となった。
- 1591 年（天正 19 年）4 月 - 転封により、輝政に代わって豊臣秀勝が岐阜城の城主となる。
- 1592 年（文禄元年）9 月 9 日 - 豊臣秀勝が没すると、織田秀信（幼名・三法師）が美濃国岐阜 13 万石を領有し岐阜城の城主となる。
- 1600 年（慶長 5 年） - 織田秀信は、石田三成の挙兵に呼応し西軍につく。関ヶ原の戦いの前哨戦で、岐阜城に立てこもるが、福島正則や池田輝政らに攻められて落城。秀信は弟秀則と共に自刃しようとしたが、輝政の説得で降伏する（のち 1605 年（慶長 10 年）に死亡した）。
- 1601 年（慶長 6 年） - 徳川家康は岐阜城の廃城を決め、奥平信昌に 10 万石を与えて、加納城を築城させる。その際、岐阜城山頂にあった天守、櫓などは加納城に、御殿建築は大垣市赤坂のお茶屋敷に移されたという。岐阜城が山城であることに加えて、かつて信長が天下取りの意思を込めて命名した「岐阜」という地名を家康が忌み嫌った（徳川氏に代わる天下人の出現を髣髴させる）からだともいわれている。

構造

山城。京都に対して東の要所に位置し、難攻不落の名城として知られているが、実際には歴史上 7 回の落城にあっている。山頂部の平坦面は少なく、井戸も雨水を蓄えるもので、戦国時代末期の大人数による長期籠城戦には本質的に不向きであった。

織田信長時代には、山頂部には信長の家族や人質が暮らしていたことが、1569 年（永禄 12 年）来岐した宣教師ルイス・フロイスの書簡から伺える。その構造は斎藤道三時代に遡るだろう。岐阜城は小牧城、安土城と同じく、城下町を見下ろす景観に優れる。つまり合戦のための城でなく、基本的に城主の居住空間であり、見せる城であった。

天主・天守

信長・信忠時代の岐阜城

麓に天主（てんしゅ）と呼ばれる御殿があり、そこへ通じる道の両側に当時は石を積んだ塀がめぐらされて、その先の上段の「千畳敷」と呼ばれるところにその御殿があった。当時としては珍しく、南蛮様式を取り入れた 4 層の華麗なものであったという。宮上茂隆の説によると、京都天竜寺の僧侶である策彦周良による命名とされる。現在、御殿跡は岐阜公園の一部として整備されており、2009 年現在も発掘調査が行われている。

山頂にも「てんしゅ」があり、こちらは「天守」と書いた。「天守」は池田輝政時代に改変され、岐阜城廃城及び、加納城築城によって他の建物と共に加納城へ移築されていたが、1728 年（享保 13 年）の落雷によって焼失している。

復興天守（初代）

1910 年（明治 43 年）5 月 15 日落成。木造・トタン葺き 3 層 3 階建て、高さ 15.15m で、長良橋の古材を利用し岐阜市保勝会の手によって建てられた。日本初の観光用模擬天守とされる。1943 年（昭和 18 年）2 月 17 日、失火のため焼失した。

復興天守（再建）

1956 年（昭和 31 年）7 月 25 日落成。鉄筋コンクリート建築 3 層 4 階建て。延べ面積 461.77m²、棟高 17.7m。天守の設計は加納城御三階櫓の図面や古文書を参考に城戸久名古屋工業大学名誉教授が設計、大日本土木が施工した。再建時の『岐阜城天守閣再建設計図』の複製が岐阜県図書館に所蔵されている。ただし、建てられた天守閣は設計された物とは異なる。

3 階までは史料展示室、4 階は展望台となっており、長良川や岐阜市街を一望する事が出来る（1 階：武具の間、2 階：城主の間、3 階：信長公の間、4 階：望楼の間）。

天守の所在地は「岐阜市天主閣 18」であり、「天守」ではなく「天主」表記である。なお、一部のウェブサイトでは「岐阜市金華山天守閣 18」の表記も見られる。

Wikipedia による

